

子どもの“人生を変える” 先生の言葉があります

2021



子どもたちは先生を見ています

LGBTs の子ども達は、自分自身が嘲笑の対象とされる可能性があることや、存在そのものを否定されるようなメッセージを日々の生活の中で受け取ってしまうことがあります。

LGBTs の子ども達は、ステレオタイプな見方で一括りにされるのではなく、個々の多様性を尊重したうえで、あるがままの存在を理解されたいと願っています。

LGBTs の子ども達は、異端視、否定、揶揄や嫌悪される存在として学齢期を過ごすのではなく、LGBTs であることを多様な在り方のひとつと捉えて生活できるような環境を望んでいます。

そのために、学校で出来ることはたくさんあります。先生に大きな期待があります。

図書館や保健室に LGBTs に関する本を置く

ことや、学校内にポスターを貼るだけでも当事者である子どもにとっては貴重な情報獲得の機会になります。ホームルームの話題として LGBTs の人権課題を取り上げることも重要な取り組みになります。学齢期の早い段階で多様性について肯定的なメッセージを受け取りそれを内面化することは、当事者である子ども達自身の自尊感情や自己肯定感を高めていくことのみならず、当事者ではない子どもにおいても人権感覚を養う貴重なきっかけになります。

LGBTs の子ども達は、誰が信頼できる大人であるかしっかりと見ています。この先生ならば自分のことをわかってくれるだろうと信じて、期待して、本当の自分の話をしてことでしょう。

学校での取り組みや先生のさりげない一言が、彼らの人生を変えることになります。

気になる子ども
いませんか?

クラスの子どもを 思い出してください。

自分のクラスの子どもが、LGBTs（エル・ジー・ビー・ティーズ）のいずれかに該当するかもしれないと考えた事はありますか？ 統計により、「学校のクラスの1～2人は、LGBTsである」ことが推定されています。今こそ、性的指向と性自認の多様性について、一緒に考えてみませんか？

こんな子ども、いませんか？ セクシュアルマイノリティの子どもたち

制服が着られない

「体が女だから、女の制服を着なくてはいけない。」
これが苦痛でたまりません。つらくて、恥ずかしくて、
とても嫌悪感と違和感に襲われます。親は「一時
的な感情だ」と相手してくれません。
どうすればいいのでしょうか…。

イジメと不登校

「オネエ」「オカマ」「ホモ」「おとこおんな」「気持ち悪い」「近寄るな」…。他の男子と何か違うところがあったのか自分でもわかりませんが、学校ではずっといじめられていきました。しかし、いじめの原因と思われる事を先生や両親に言うことができず、学校へ行けなくなり、不登校になってしまいました。

自傷行為

自分がゲイであることを自分自身ではそれなりに受け容れていたように思います。授業や先生、親から「同性を好きになっても、両性であっても異常ではない」という肯定的な一言を言って欲しいただけです。自分を罰するような気持ちで、自分の体を故意に傷つけました。

LGBTsの 子どもたちの実態

自殺を考える

—64%が自殺を考え、14%が未遂という現実—

「いじめ」と「不登校」

LGBTsの子どもは、差別やいじめ被害の経験割合がとても高いことが、国内外の調査結果で明らかになっています。彼らにとって、学校が安全な場所ではなく、「ここでどうやったら生き延びていくことが出来るか」と、常に恐怖を感じる場所になってしまっている場合も少なくありません。

自傷行為のリスクが高い

LGBTsの「刃物などでわざと自分の身体を切るなどして傷付ける」自傷行為経験率は若年層に高率です。10代に限定すると、レズビアン 47.8%、ゲイ 16.9%、バイセクシュアル男性 15.3%、バイセクシュアル女性 42.1%、トランス女性（MTF）42.9%、トランス男性（FTM）50%*であり、首都圏男子中高生の自傷行為経験率 7.5%**と比較しても 2～7 倍であることがわかっています。自傷行為は繰り返す傾向にあり、自死といった最悪の結果にならないために、私達に何ができるのでしょうか。

日本のゲイ・バイセクシュアル男性対象の調査(2005年有効回答数5,731人)
日高 康晴ほか(2007)厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究推進事業
ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2

2,095人の若者男女を対象に大阪で実施された街頭調査によれば、
異性愛男性と比較してゲイ・バイセクシュアル男性の自殺未遂
リスクは5.98倍高い、といふこともわかっています。

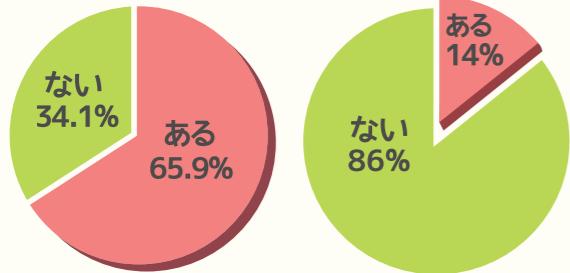
Hidaka Y, et al (2008) Attempted suicide and associated risk factors among youth in urban Japan. Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology, 43(9), 752-757

身近にいる子どもの話です～クラスに1～2人という統計～



自殺を考えたことがある

自殺未遂をしたことがある



LGBTsの 子どもたちの実態

「体の性」と「性自認（心の性）」

一性をどのように認識し、どのように考えるか

さまざまな「性のあり方」

生まれた時の性別である「体の性」と、自分が自覚している「性自認」は、必ずしも一致するものではありません。さらに、「男だから女が好き」とは限らないし、「女だから男が好き」とは限らないのです。実際、「性のあり方」は多様で、例えて言えば「グラデーション」のようなもの。しかし、現実には偏った情報もあり、子どもが正しい知識を得ることが困難な場合もあります。LGBTの4類型だけで表すことは難しく、このリーフレットでは、LGBTをはじめとするセクシュアルマイノリティという意味でLGBTs（エル・ジー・ビー・ティーズ）と記します。

L（レズビアン） 女性の同性愛者

G（ゲイ） 男性の同性愛者

B（バイセクシュアル） 両性愛者

T（トランスジェンダー） 生まれた時の法的・社会的性別とは違う性別で生きる人、生きたいと望む人

Q（クエスチョニング） 性的指向や性自認がはっきりしない、定まらない、その有り様を探している人

X（エックスジェンダー） 男性・女性のどちらでもない、どちらもある、性別が定まらないといった自認を持つ人

自分はどうなっていくの？
将来に希望がもてない
自分が「レズビアン」と認識してから、このまま大人になって
いくのが怖いです。この先、私はどうなるんですか？ どうやって
生きていけばいいですか…？

じつはカミングアウトしたい

もう、隠して生きるのは嫌だ。トランスジェンダーであることを、みんなに打ち明けたい。体は男でも、自分が男であるという自覚は全くないです。自分らしく生きたい！

先生との交換日記

毎日、先生に勉強してきたノートをみてもらっていました。そのうち、同性が好きな自分のことをノートに書くようになりました。先生は毎日返事をくれました。高校時代にあの先生に出会えたから、自暴自棄になることもなく大人になれたと思っています。

どう考えますか?

ILGBTs*意識調査レポート 教員21,634人のLGBTs*意識調査レポート

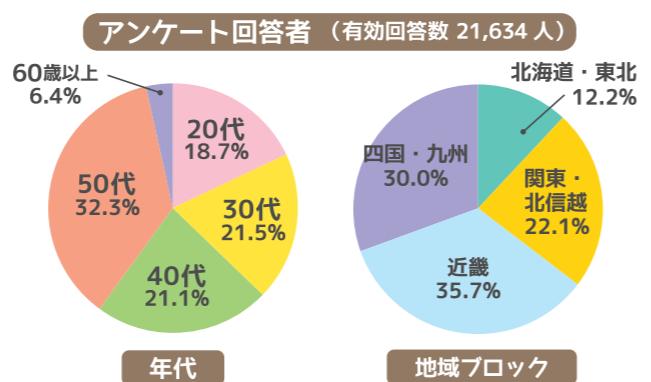
*Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender

子どもが抱える性的指向や性自認の多様性

36自治体で実施した今回の調査について

国民の5~8%程度がLGBTsであることが推定されているこの時代に、私達はどこで正しい知識や情報を得ることができるのでしょうか。2011~13年(以下、本リーフレットでは2011年調査と表記)に全国6自治体5,979人の保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校に所属する先生方に実施した調査の後続研究として、教育現場の先生方にご協力をいただき、LGBTsと教育について実態把握のための調査を実施しました。HIV/AIDSや性感染症、いじめや不登校の背景要因として性的指向と性自認の関与が指摘されるようになっています。

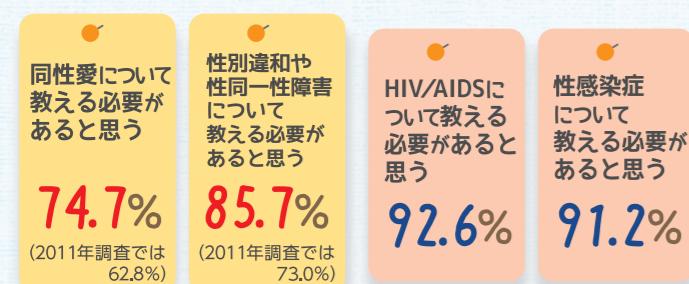
集計結果の概要をご報告することを通じて、子ども達の多様性の理解の一助となることを心より願っております。



小学校、中学校、高等学校、特別支援学校に所属する 21,634 人(平均年齢 43.3 歳)、回答者の自認する性別の分布は男性 51.2%、女性 48.3%、その他 0.2%、選択しない 0.4% でした。アンケートの結果とともに、教育現場における LGBTs について考えてみたいと思います。

1 LGBTsについて、授業で取り扱う必要がある

教育の現場で教える必要があると思いますか?



半数以上の先生が「必要」と考えています

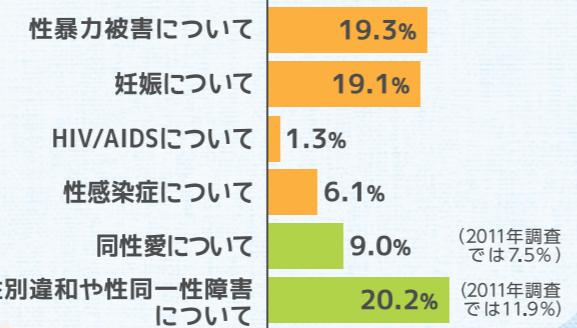
現在、LGBTsについて授業で取り扱うことを実践している学校は、まだまだ少数です。しかし、実際に教育の現場に立つ先生方の7割以上が「必要がある」と捉えていることが明らかになりました。最近の一部の教科書には、性的指向と性自認の記載がはじまっており、授業で取り扱うことを後押しする環境になりつつあります。

2 LGBTsの子どもと関わった経験のある先生はごく少数

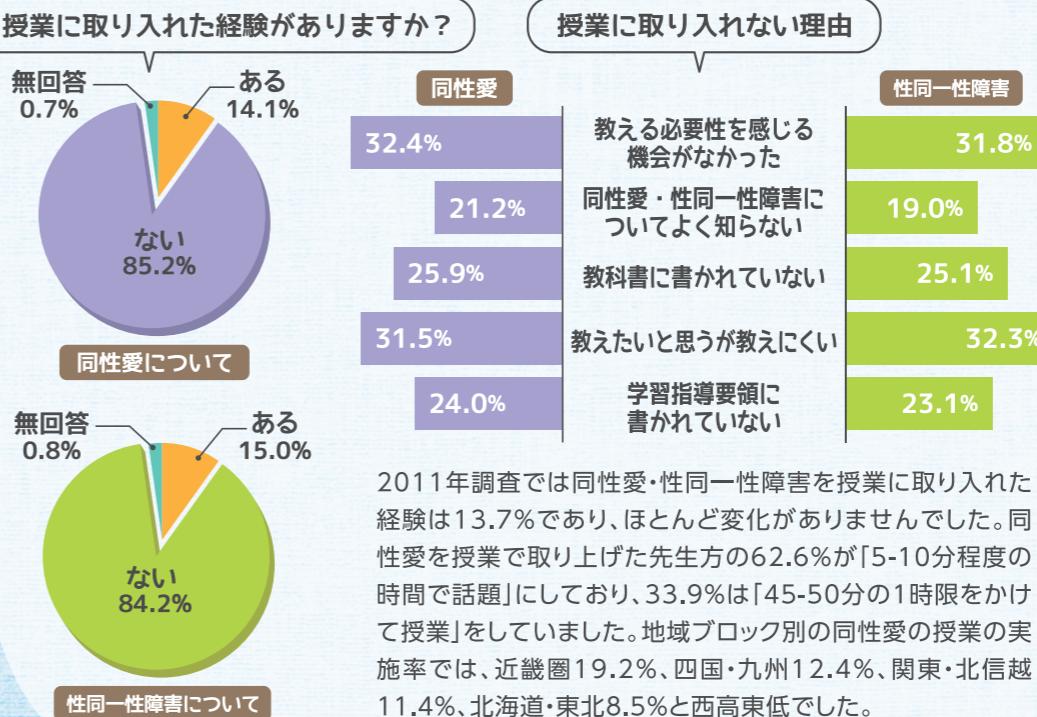
SOSを出せない子どもたち

LGBTsについて子ども達と関わりをもった経験がある先生は、2011年調査に比較すると同性愛では微増、性別の違和感や性同一性障害については2倍弱に増えていました。それに対し、性暴力被害や妊娠、HIV/AIDS、性感染症について生徒と関わった経験は軒並み減少していました。男性同性間におけるHIV感染が続いている現在、HIV/AIDSや性感染症の予防教育実施の際は、性的指向や性自認といったセクシュアリティの多様性について適切に扱うことが不可欠です。また、LGBTsの子ども達の存在は可視化されづらい側面がある一方、彼らは困っている時に周囲の大人に相談することや、助けを求める援助希求行動そのものを躊躇する場合があることに留意が必要です。

実際に児童生徒と関わったことがありますか?



3 なぜ、LGBTsについて、授業で取りあげないの?



2011年調査では性同一愛・性同一性障害を授業に取り入れた経験は13.7%であり、ほとんど変化がありませんでした。性同一愛を授業で取り上げた先生方の62.6%が「5~10分程度の時間で話題」にしており、33.9%は「45~50分の1時限をかけて授業」をしていました。地域ブロック別の性同一愛の授業の実施率では、近畿圏19.2%、四国・九州12.4%、関東・北信越11.4%、北海道・東北8.5%と西高東低でした。

LGBTsである子どもの自尊感情を育てる

授業で教える必要性があると認識している一方、実際に授業で取り扱った経験は低率でした。性的指向や性自認の多様性について先生から子ども達に投げかけてみませんか?簡単な話題でも短い時間でも大丈夫です。LGBTs当事者の子どもは、不安や戸惑いを解消するために、肯定的な情報や正しい知識を欲しています。授業で少しだけでもセクシュアリティの多様性について話題になることや、肯定的なメッセージが発せられることは、彼らにとって救いになるはずです。

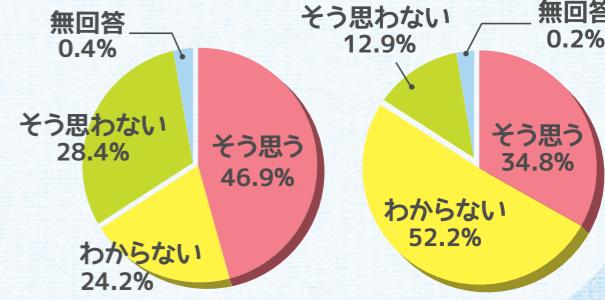
4 同性愛についての間違った理解

性的指向は選べるの?

大変興味深い結果が示されました。約7割の先生が、性的指向は本人の選択によるものであると誤解していることがわかりました。「同性愛者になることは、個人に選択権があり、拒否することも、受け入れることも自由なのだ」という理解は誤りです。性的指向は嗜好や志向とは異った“指向”であり、選択したり、あるいは修正できるものではないと理解することが適切です。また、先生方の約3人に1人は「性的マイノリティの児童生徒が、少なくともクラスに1人はいると思う」と認識していました。当該児童生徒がクラスに存在することを前提にした取り組みや言葉掛けが必要です。

同性愛になるか異性愛になるか、本人の選択によるものだと思いますか?

性的マイノリティの児童生徒は、少なくともクラスに1人はいると思う



5 クラスに1~2人はLGBTsだという現実

これまでの教員生活で、同性愛、性自認について悩んでいた児童生徒はいましたか?



LGBTsの人口規模

全国の20~59歳を対象にしたインターネット調査¹⁾(有効回答数89,366人)では、レズビアン1.70%、ゲイ1.94%、バイセクシュアル1.74%、トランスジェンダー0.47%であり、LGBTs人口は5.85%と推定されています。日本労働組合総連合会が20~59歳の有職者を対象にした調査²⁾(有効回答数1,000人)では8.0%が該当すると報告され、他研究においても人口の5~8%程度存在すると見積もられています。

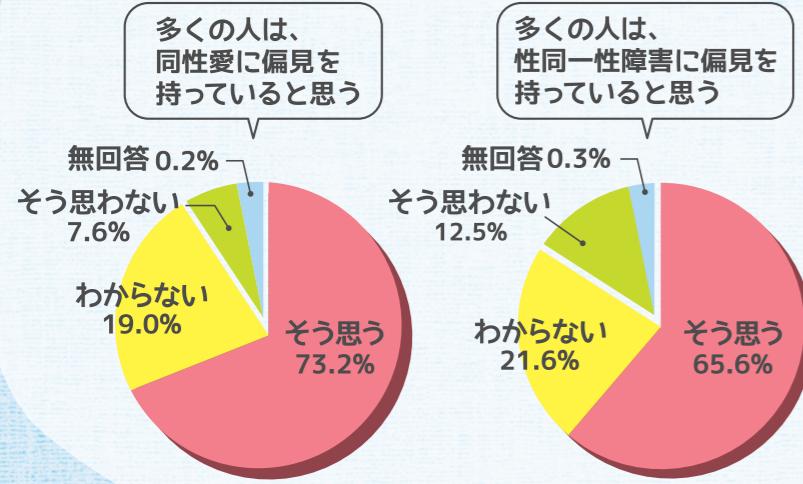
それでも男女の区別

世の中には「男と女」に区別されているものがたくさん存在します。もちろん、学校の中も例外ではありません。例えば、出席簿の順番や「さん、くん」などの敬称、制服、部活動、進路など、男子と女子を区別しているものが数多くあります。このように日々の生活の中で「あたりまえ」と思われている男女の区別が大変辛く、受け入れがたく感じている子どもも存在します。

1) 博報堂 DY ホールディングス・LGBT 研究所 (2016) 博報堂 DY グループの株式会社 LGBT 総合研究所、6月 1 日からのサービス開始にあたり LGBT をはじめとするセクシャルマイノリティの意識調査を実施 <https://www.hakuhodo.co.jp/uploads/2016/05/HDnews0601.pdf>

2) 日本労働組合総連合会 (2016) LGBTに関する職場の意識調査 <https://www.jtcrenko.or.jp/info/chousa/data/20160825.pdf>

6 LGBTsについての世間の目、そして教師の目

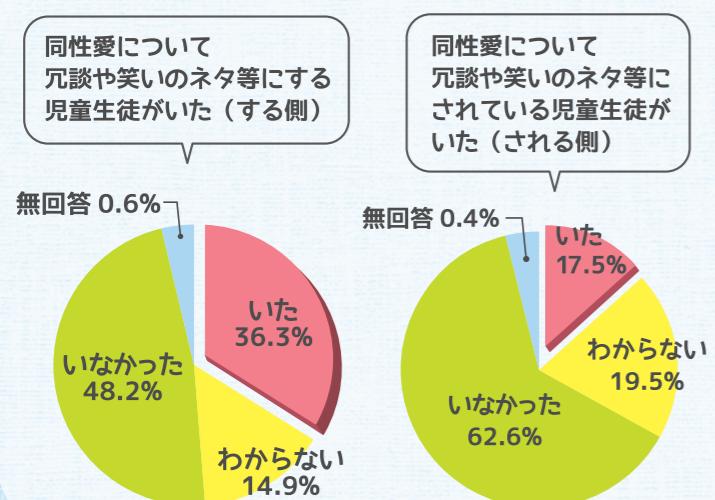


世間は LGBTs に対して否定的？

世の中がLGBTsについてどう感じているのかをお聞きすると、約7割が「LGBTsは世間から偏見を持たれている」と認識していることが分かりました。2011年調査の結果に比較してLGBTsへの差別があるという認識の割合は高まっています。LGBTs当事者からの情報発信や調査結果の報道、同性パートナーシップ制度が各地で導入されていることなどが、認識の変化に影響を与えていたと思われます。



7 子どもたちにおける同性愛についての差別的な言動



差別的な子どもたちの言動を見逃していませんか？

現在のマスメディアでは、「おネエ」「ホモ」「おかま」といった言葉で同性愛を揶揄することが多くみられ、笑いのネタとして、子ども達にもこれらの言葉が浸透しているようです。しかし、セクシュアリティに関する言葉の暴力(からかいや差別的な言動を含む)により、自尊感情を深く傷つけられる子ども達が一定数存在していることや、それが深刻ないじめや不登校、自傷行為や自殺未遂につながる可能性も十分にあります。

差別的な言動をされている子どもからSOSを発することが困難であることを考慮すれば、先生や大人達が見逃してしまうことが決してないように、場合によっては積極的な関わりや介入も必要です。



8 出身養成機関での実施状況は・・・

「学ぶ機会がない」という現実をどうする？

出身養成機関で「HIV/AIDS」「性感染症」については学んだ割合は3割程度であるのに対して、LGBTsや性暴力被害についてはその半分程度という結果でした。LGBTsの子ども達の多くが学齢期にいじめや不登校、自傷行為に直面しており、その背景要因として、もしかしたらセクシュアリティのことがあるのかもしれない、といった想像力を持ち、アンテナを高く立てみてください。

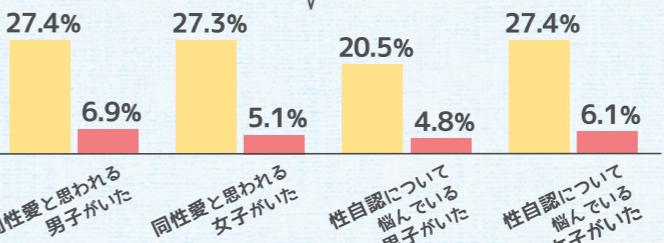


9 きちんと知ると、子どもとの関わり方が変わる

正しい知識と理解、そして実践

教員養成機関(大学の教育学部など)の必修カリキュラムに、性的指向と性自認の多様性は含まれておらず、一部の養成機関が独自に設定する科目等によって扱われているのが現状です。教員養成課程で性的指向と性自認について学ぶことを必須化することや、現職研修として全教員が学ぶ機会を確保するなど制度設計が求められます。

これまでの教員生活で、同性愛、性自認について悩んでいた児童生徒はいましたか？



出身養成機関・独学・教員になってからの研修で同性愛と性同一性障害について学んだ経験

いずれの機会においても同性愛と性同一性障害の両方を学んだ経験あり
3.1%

いずれの機会においても同性愛と性同一性障害の両方を学んだ経験なし
19.5%

学びが多い先生ほど、LGBTsの子どもたちと関わりがある

これまでにいずれの機会においても学んだ経験がある先生ほど、LGBTsの子ども達の存在認識や実際の関わり経験が高く、LGBTsに関する授業を実践していることがわかりました。LGBTsの子ども達との関わりがあったことによって、学ぶ必要性が生じて授業の実施につながった場合もあるでしょう。これらのことから、学びの機会を確実に確保していくことが何より大切です。

10 文部科学省からの通知文書を知っていますか？

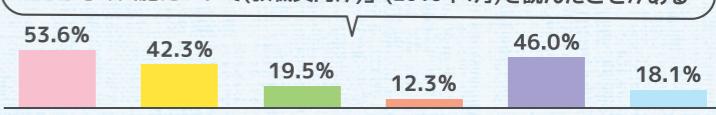
子どもの命を守るために

2015年と2016年に文部科学省から発出された性的指向・性自認に関する文書は先生方にほとんど読まれていない一方で、いじめの防止等に関する文書は多くの先生方が読んでいました。LGBTsの子ども達のいじめ被害のみならず、不登校・自傷行為経験率が極めて高率である現在、子どもの命を守るために、性的指向と性自認の多様性への取り組みもいじめ対策の一環として不可欠です。

「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」(2015年4月)を読んだことがある



「性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について(教職員向け)」(2016年4月)を読んだことがある



「いじめの防止等のための基本的な方針」(2017年改定)を読んだことがある

